

さよなら、野口健

目次

第一章 頂の先にあるもの

縁切り神社	8
エスミ・ケン・ノグチ	12
母	17
夢遊病	22
アリ(蟻)じゃない	30
世界のウエムラ	36
きつかけ	41
山へ	44
指輪	49
一五歳の私	53
野望	58
一芸一能	61

第二章 政治家への野望

三・五流
140

139

植村直己冒險賞受賞
135
山頂は目指さない
131
一日のズレ
121
撤退を決めた
110

できることはただひとつ
惨敗
97
ピンとこない
92
できること
106

挑戦
67
スponサー企業の獲得
南極—自撮り
結婚
79
76
村上龍
87
71

アルピニストとは？

148

受賞理由 152

岳龍会会員 155

俺は日本人だ 158

橋本龍太郎

石原慎太郎 162

野口健との出会い

事務所からの独立

永田町 185

出馬辞退 191

精神科病院へ入院

179 174

185

199

191

第三章 迷走の果てに

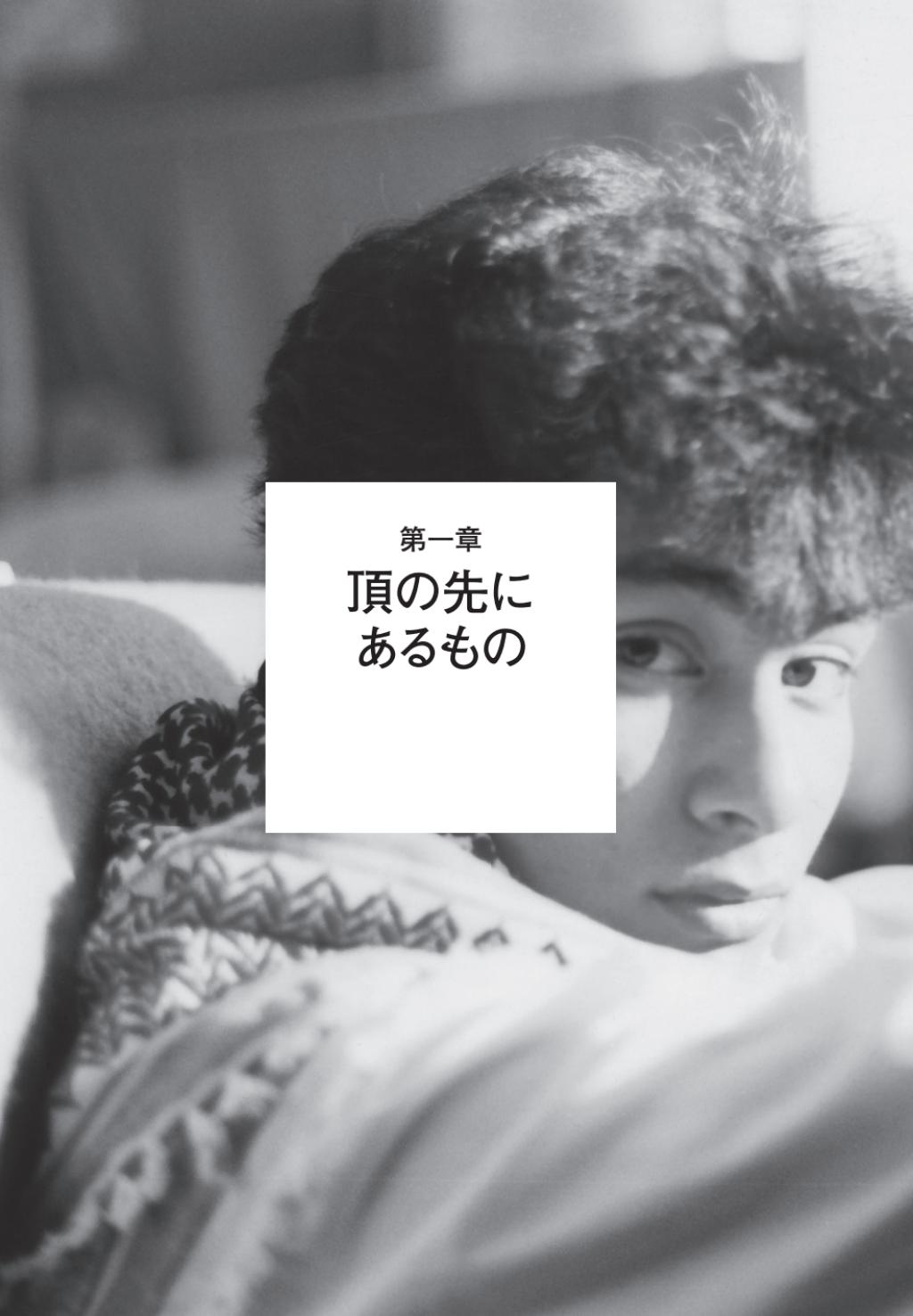
応援演説への流れ
赤ちゃんの泣き声

219 212 211

199

土下座	お前は人生で何がしたい?	232
S O S	原稿を見て欲しい	249
「、」	現実歪曲	264
小池百合子との取引	炎上	278
栗城史多	小池百合子との取引	289
パサン・リンジ・シエルパ	炎上	297
ターパ・ゴダル・ウパカル	栗城史多	304
さよなら、野口健	パサン・リンジ・シエルパ	323
あとがき	ターパ・ゴダル・ウパカル	328
	さよなら、野口健	317 313

カバー写真 平賀淳 2008年・メラビック
表紙・扉写真 野口健事務所 平賀淳
ブックデザイン 鈴木成一デザイン室



第一章

頂の先に あるもの

縁切り神社

どんな縁も絶つことができる、最強との呼び声が高い縁切り神社が京都にある。

祇園のはずれにある安井金比羅宮。やすいこんぴらぐう 境内に鎮座する縁切り縁結び碑は、高さ約一・五メートル、幅は約三メートルの巨石であり、形代と呼ばれる無数の白いお札がびっしりと貼られ、中央下部には穴が開いている。

本殿へのお参りを済ませ、お札に願いを書き込む。お札を手に、碑の表側から中央下部の穴をくぐる。穴は大人ひとりがぎりぎり、それも這はう格好でしかくぐることができない。表から裏に通り抜けることではまずは「悪縁」を切る。次に碑の裏側から表側に向かって願いごとを念じながら穴をくぐる。これにより「良縁」を結ぶ。最後に願いが書かれたお札を碑に糊で貼りつける。これで祈願が完了する。

事前リサーチにより、私はこの縁切り神社の参拝方法を何度もイメージし、熟知していた。だが実際に京都を訪れ、タクシーあと数百メートルのところまで来ると、ためらいが生じてきた。スマホのズックマークには安井金比羅宮の写真がある。悪縁を絶ち切りたいと願う全国

からの参拝者が糊づけしていった白いお札で覆われた碑は、もはや元の石の色がわからない。写真からでも悪縁に苦しめられた人々の怨念が伝わってくる。そのいわば呪いの碑の写真をあらためて見ていてるうちに私は、穴をくぐれば間違いなく縁が切れる、と確信めいたものを感じていた。

神社はもう近くだ。だが、近づくにつれて私は、縁が本当に切れてしまうことに今度はためらいを覚え始めた。迷いに迷つた。結局、行かなかつた。行けなかつた。

私はお札にこう書こうとしていた。

「野口健との縁が切れますように」

アルピニスト。

一九九九年、二五歳でエベレストの登頂に成功し、七大陸最高峰世界最年少登頂の記録を樹立。富士山やエベレストの清掃など、環境活動や社会貢献に積極的に取り組む。

メディアで野口健が紹介される際によく使われるフレーズだ。

私が野口健と初めて会ったのは二〇〇三年の六月だつた。それから一八年間、私は野口のマネージャーを都合三度も務めた。蜜月の時代もあれば、倦怠^{けんたい}や互いに傷つけ合う不和の時代もあつた。野口の優しさにひとり涙した時もあれば、二度と会わないと絶交を誓つた期間もあつ

た。ただ、どんな時も野口のことを考えない日はなかつた。ずっと頭から離れない存在。そんな人間は四三年間生きてきた私にとつて、野口しかいなかつた。

野口健を消したい、私はある時からそう思うようになつていた。縁切り神社に背を向けた私は東京に戻り、その後、糺余曲折を経て、正反対の試みをすることになる。縁を切る、のではなく、野口健と徹底的に向き合い、一冊の本にまとめあげようと決めたのだ。

さて、どこから書くか。いろいろと調べているうちに、ある表現にぶつかつた。

「登山家としては、三・五流」

これはフジテレビ系列のバラエティ番組『ナダールの穴』(二〇一一年一月一日放送回)での山岳ジャーナリスト・服部文祥^{はつべいぶんじょう}の発言だ。服部は山岳専門誌『岳人』の編集部員であり、登山家として世界第二の高峰K2への登頂をはじめ、日本各地の難所といわれる山々の登山歴を持ち、近年では装備や食料を極力持たずに行う「サバイバル登山家」として多方面で旺盛な活動をしている。

「マラソンでたとえると、栗城君とか野口君とかは市民ランナー的な感じ」

「登山家としては、三・五流」

栗城史多^{のぶかず}とは七大陸最高峰の単独無酸素登頂を目指していた登山家であり、二〇一八年五月

に三五歳の若さでエベレストで滑落死した。メディアへの露出が非常に多い登山家だったのと、その名前を目にしたことのある人は多いだろう。

服部は続ける。

「野口君とかもアルピニストとかって言うけど、ほんとにアルピニストになろうと思つて努力している人がいるのに、そうじやないのにアルピニストだつて言うのは、俺はその人たちに対して侮辱していると思うけどね」

「どえらい毒を吐きますね」と驚くお笑いタレントで司会役の千原ジュニアに対し、「いや、ほんとのこと言つてるだけだと思うけど」と服部は断言する。

はたしてこれらの発言をどうとらえるか。私には、その判断材料がなかつた。私は登山界の人間ではなく、世間一般の多くがそうであるように登山の世界については無知に等しかつた。

そんな私にとって服部の指摘は新鮮だつた。先ほど述べたように、野口健は一九九九年に二五歳で七大陸最高峰世界最年少登頂の記録を樹立し、二〇〇七年にはエベレストに再び登頂し、第一二回植村直己冒険賞も受賞している。にもかかわらず、「登山家としては三・五流」とはどういうことなのだろうか。

ここをひとつ切り口にしてみよう。私はそう決めた。

エスミ・ケン・ノグチ

本当にこれが私の甥かしら。

叔母である野口公子は、初めて野口健と対面した時の印象をそう語る。
 「髪の色って変わるんですよ。健は今は黒髪ですけど、初対面の時は金髪でね。どこからどう見ても外国人の子。本当にこれが私の甥かしら、と思いましたよ」

一九七三年八月二一日、野口健は日本人の父・雅昭まさあきとエジプト人の母・モナとの間に生まれた。モナの父はエジプト人とレバノン人の両親を持ち、母がフランス人とギリシャ人の両親であつたため、野口健には合計五つの国の血が流れている。

雅昭は外交官であり、エジプトの日本大使館に三等書記官として勤務していた時に、日本航空のカイロ支社に勤務する客室乗務員だつたモナと出会い、結婚した。モナの本名はシモン・タドロスだつたが、若い時からモナと通り名で呼ばれており、この結婚を機に、野口モナとなつた。

出生時、雅昭がニューヨークの国連本部に勤めていたため、野口はボストンの病院で生まれ

た。その後、雅昭の転勤に伴い、生後六カ月でサウジアラビアのジッダへ。そして、四歳の時、野口一家は東京・三軒茶屋の外務省官舎に移り住むことになり、野口にとつて初めての日本での生活が始まった。

世田谷区立池尻幼稚園に入園した野口は、登園初日のことを今でも鮮明に覚えている。サウジアラビアで通った幼稚園は地元の施設だったため、この時、野口が話せたのはアラビア語のみ。日本語ができなかつたので、「エスミ・ケン・ノグチ（僕の名前は野口健です）」とアラビア語で自己紹介をした。

教室中が一瞬で静まりかえり、しばらくすると皆がざわめきだした。数日後、昼休みに砂場に遊びに行くと、砂や小石と一緒に「ガイジン」「ガイジン」といった言葉が飛んできた。「ガイジン」という日本語の意味は野口にはわからなかつたが、その言葉は砂や石よりも強烈で、悪意の塊が飛んでくるように感じていた。

「ガイジン」

これが、野口が初めて覚えた日本語だつた。

戸籍上の名前は野口健だが、野口にはモナが命名した「バンダル」というアラビア名があつた。これは野口がサウジアラビアの幼稚園に通う際に、アラビア語の名前があつたほうがいい

ということでモナがつけたものだ。バンダルとは「港」を意味するアラビア語で、雅昭は「おそらくアラブの世界で有名な人の名前だつたのではないか」と述懐する。

野口は、このアラビア名が嫌で仕方がなかつた。いじめられる原因のひとつがアラビア語であるにもかかわらず、モナはそんなことはおかまいなしに野口を「バンダル」とアラビア名で呼ぶ。モナは身体も大きく、とにかく派手で、どう見ても外国人であり、一緒にいることで自分が「ガイジン」として見られる。だから、モナと散歩をするのも億劫おつかうだった。

いじめはエスカレートし、池に落とされたり、集団で無視されるようになつた。野口はいじめの原因が「アラブ的なもの」であるととらえていた。それは外見であり、言葉であつた。外見はどうしようもないが、言葉は努力で変えられる。以後、野口は一切アラビア語を口にしなくなる。

家に帰れば、モナはアラビア語を忘れさせないために懸命に話しかける。しかし、野口は口をつぐんでしまう。そして、いつしかアラビア語を完全に忘れてしまつた。五歳上の兄の野口哲也は今でもある程度はアラビア語を話せるが、野口はそうでない。

ただ、叔母の公子は「瞬間にアラビア語が出てくることもあるのでは」と言う。

「小学校三年生から健はエジプトに住むことになりましたが、たとえばエジプトで喧嘩したとしたら、パツとアラビア語が出てくると思いますよ。脳の仕組みってわからないですが、日頃

は忘れていても完全に記憶から消えるというよりも、どこかで覚えているんじゃないかしら。でも、池に落とされたり、石を投げられたり、『ガイジン、ガイジン』ってあんなにいじめられたら、絶対に話さないと決心しますよね」

池尻幼稚園卒園後には世田谷区立駒繫こまつなぎ小学校に入学するが、ここでもいじめは続いた。だが、いじめられて野口が泣きながら帰宅すると、モナは決して野口を家に入れない。モナの方針は「やられたら、やり返しなさい」といったものだった。

「誰にやられたの?」と問われ、野口が名前を告げると「その子たちを殴ってきなさい」とモナは玄関のドアを閉める。

「チンチン、ついてるでしょ」と言われることも多かつた。

「うん。ついてるよ」と答える野口に「だつたら、やり返してきなさい」とモナは命じる。「はい……」と答えた野口はひとり官舎の周りをぐるぐると歩き、時間をつぶす。野口はいじめっ子たちが怖くて仕方なかつた。そして、一時間ほどたつてインターホンを押し、「やり返してきた」とモナに嘘をつく。モナは「よくやつたわ」と頭を撫でて抱きしめると、野口を家に入れた。そんなことが繰り返された。

だが、転機が小学校二年生の時に訪れる。やつとできた友達と官舎内の敷地で遊んでいた時

のことだ。大柄で坊主頭のいじめっ子のリーダーがやってきて、突然、野口のもとからその友達を連れていこうとした。

「野口といると、ガイジンのバイキンがうつるぞ」

その台詞を聞いた瞬間、野口はカツと全身の血が逆流する感覚を覚えた。咄嗟に足元に落ちていた植木鉢の破片を手にすると、走りだし、背後からリーダーの坊主頭を思いきり殴った。坊主頭から鮮血が流れ、リーダーは泣きわめいた。そして、この日を境に、リーダーの配下の子どもたちは一斉に野口に従うようになり、野口はいじめられっ子から、いじめっ子へと変貌する。その後、江東区立越中島小学校に転校する小学校二年生の秋まで、野口はこれまで自分をいじめた子どもたちをターゲットに執拗に仕返しを続けた。

これまでのいじめの経験から、転校先の学校では最初が肝心だと野口は決めていた。もう二度とあんな思いはしたくなかった。だから、初日から何かあればすぐに手を出していた。授業中もどんどん手をあげて発言をした。当然アラビア語は話さないし、アラブを感じさせるそぶりは一切見せない。野口なりの身を守る方法だった。そのことが功を奏したのか、いじめは一切なく新たな学校生活は野口にとって楽しいものだつた。

しかし、雅昭の転勤のため、半年で今度はエジプトへと引つ越すことになる。

母

一九八二年六月、雅昭のエジプト・カイロでの勤務が正式に発令された。カイロは一六年前に雅昭が外交官としてスタートを切り、モナと結ばれた思い出の地でもあった。野口はいじめられることなく、せっかく楽しいスタートを切ることができた学校を離れるのは不本意だったが、モナは「ママの国に行けるのよ」と大喜びだつた。

そして、一九八二年七月に野口一家はエジプトのカイロへと移る。野口は兄の哲也とともにカイロの日本人学校に転校した。野口のカイロでの生活は小学校三年生から六年生の二学期までになるのだが、このカイロ時代に大きな出来事があった。母・モナの不倫である。もともと、日本にいた頃から夫婦仲は穏やかなものではなかつた。特に雅昭の実家に家族で遊びにつた際の祖父や祖母のモナへの冷たい対応や、雅昭の帰宅が遅い日が続くことが夫婦喧嘩の引き金となることが多かつた。

カイロでの生活が始まって一年ほどが過ぎた頃、モナはエジプト人の美術教師・ガマールと不倫関係となつた。ガマールはカイロにある美術大学の講師を務めており、絵と彫刻を専門と

した地元では少しばかり名が知られた芸術家だった。モナは美術大学にある社会人向けの講座に通つており、初めは生徒と先生といった関係だつた。

しかし、その関係は急速に発展していくことになる。ある日を境に野口が小学校から帰ると毎日のように家にモナとガマールがいるようになつた。二人は一緒に絵を描いたり、お茶を飲んだりしていた。そして、ガマールは雅昭が帰宅する前には帰つていつた。

小学生の野口の目から見ても、何が起きているのかは明らかだつた。見ないふりをするのはつらかったが、野口が何よりも恐れたのが父・雅昭に知られることだつた。

野口は父親つ子だつた。忙しい父だつたが、日本に住んでいた幼い頃、北軽井沢の別荘で休暇中に遊んだ父との記憶は今でも忘れられない。ある時、池をつくろうと父と兄と全身汗まみれになりながら、大きな穴を掘つた。「よし、水を入れるぞ」と雅昭が穴に水を流し込んだものの、水はスープと土中にしみ込んでしまい、結局、池にはならず男三人で大笑いした。

カイロに移り住んでからは、外交官である父の活躍を目の当たりにすることも増えた。雅昭はアラブの専門家だつた。外交官として大勢のアラブ人や日本人、さらに他国の外交関係者を前に日本の代表としてアラビア語、英語、日本語を交え、笑いをとりながら、場をリードする姿は眩しく、「オヤジ、かつこいいなあ」と子ども心にも感動した。まさしく自慢の父であり、野口は雅昭が好きでたまらなかつた。そんな父にモナの不倫を知られ、傷ついて欲しくなかつ

たのだ。

不倫相手のガマールは「ケニー、ケニー、ケニー」とすり寄ってきて、野口に気に入られようと必死だった。もじやもじやの髪の毛が不潔で、野口はとにかくガマールが生理的に嫌で仕方がなかつた。ある時、ガマールが紙粘土で模型を作ってきたことがあつた。黄色いクラシックカーの模型で、絶対にもらつちやいけない、と思いつつも、野口はつい手を差し出してしまつた。その日の夜、遅くに酔つて帰宅した雅昭が野口の部屋に入ってきて、そのクラシックカーをいきなりゴミ箱に投げ捨てた。野口はベッドの中で、オヤジは全部知っているのかもしれない、と感じた。

当時、兄の哲也はエジプトに一年数カ月住んだのちに、高校受験のため東京の世田谷に住む祖父たちのもとに帰つていた。哲也が当時を振り返る。

「母ちゃんの不倫は僕が日本に帰国してから始まつたわけです。だから僕はその現場を直接には見ていないわけで、正直、ピンとこない部分もある。だけど、弟は現場を逐一見ていて、僕がエジプトに行つた時に弟から話を聞くわけです。『あやしい状況になつている』と。母ちゃんが下着姿で絵の先生と家にいるとか、手をつないで街を歩いているのを目撃したとか。だから、深刻な事態が起きているのはわかつていました」

野口が小学校五年生の三学期を迎えた頃、モナは第三子の出産のため、姉の住むカナダのモントリオールへ飛んだ。兄の哲也はすでに日本に戻っていたため、この頃から野口は雅昭との完全な一人暮らしとなっていた。ただ、この時、雅昭はエジプト公使という大使館の中でも一番目の地位にあり、どうしても毎晩の帰りは遅くならざるを得なかつた。

野口一家が住んでいたのは、ゲズイーラ島というナイル川の巨大な中洲であり、高級住宅が立ち並んでいた。野口の住む家は、外交レセプション等で使用することもあり、リビングひとつとっても優に一〇〇人は入れるようなどだつ広い家だつた。

エジプト人のお手伝いさんがいたが、夕方になると帰つてしまふ。野口はお手伝いさんに帰つて欲しくなかつた。「帰らないで」と言いたいが、ただ、彼女にも待つてゐる家族がいる。それを想い、言葉をのむ。そして、お手伝いさんが用意してくれた夕飯をひとりで食べた。小学生の野口にとつて巨大な家で過ごすひとりの夜は、ただただ怖いだけだつた。

そのうちに、この夜の孤独に耐えられず、野口は街に繰り出すようになる。仕事が忙しく面倒を見ることができないという罪悪感もあつてか、雅昭は日本円で月に一万円程度のお小遣いを与えた。これは当時のエジプトの公務員の月収をはるかに超える金額だつた。日本人学校の仲間と連れ立ち、タクシーに乗り、イギリス人向けの将校クラブだつたスポーツクラブで遊んで、映画を見に行き、レストランで仲間に夕食を奢り、またタクシーで帰宅するといふ毎日。

生活はどんどん荒んでいった。

野口が小学校六年生の時、モナはカナダで男の子を出産した。名前は野口勇。^{ヨウ}モナが勇を出産した際、野口は雅昭とカナダを訪れている。勇を抱きかかえてあやす雅昭の姿を横目に、野口はこんなことを考えていた。

「この子はオヤジの子じゃない」

夢遊病

一九八五年、野口が小学六年生の時、雅昭はイギリスにある王立国際問題研究所に一年間の研修に出ることになった。野口と雅昭はエジプトを離れ、一月中旬にイギリスに入った。野口はこの時まだ知らないが、雅昭とモナの離婚は避けがたい段階に入っていた。現実問題として雅昭は、自分一人では野口の面倒を見ることはできないと判断していた。

そこでロンドン南方のギルフォードにある全寮制の立教英國学院に野口を入れることになる。イギリスの寄宿学校をモデルとし、小学校五年生から高校三年生までの男女共学。当時の児童・生徒数は、平均して二五〇人から三〇〇人ほど。寮生活のため、風呂も食事も睡眠も二四時間一緒の集団生活だった。

小学校六年生の三学期の終業式の日のことだつた。クラスメイトたちの両親が迎えに来ている中、何故か雅昭はひとりだつた。その姿を見て、野口は「あれ?」と思つた。母ちゃんがいない。エジプトからイギリスに引っ越してきた際、モナも弟の勇とともにカナダからイギリス

に越してきていて、野口が立教英國学院に通い始めるまでは短い期間であつたが四人で住んでいたのだ。

野口は、勇がまだ小さいから母ちゃんは車の中で待っているのかな、と想像してみた。でも、駐車場に向かって歩き始めても雅昭はモナのことには何も触れない。野口は「母ちゃんは駐車場にいるの？」それともいないの？」と思いながら、雅昭と歩を進めた。隣にいる雅昭から漂う雰囲気が暗く、歩き方がどこかぎこちないと野口は感じていた。何よりも、いつもお喋りな父親が何も話さないのだ。

途中から野口は期待しないようにした。車の中に母ちゃんがいるんだ、と思つて、実際にいなかつたら落ち込む。だから、母ちゃんはいないんだ、と思い込むようにした。そして、駐車場にある無人の車を見た時、野口は「ああ、離婚したんだ」と思つた。

ロンドンに帰る車の中でも、雅昭は無言で運転していた。二〇分ほど沈黙が続いた。この長い沈黙で野口は、離婚はいよいよ一〇〇パーセント間違いない、と確信した。離婚したということをオヤジは言いづらいのだろう、と思った。早くオヤジを楽にさせてあげたかった。お互いい樂になろう、と野口は思つた。

「母ちゃんは？」と尋ねた。

雅昭は返事をしない。野口は再度尋ねた。

「母ちゃんは？」

「母ちゃんとなあ、いろいろあつて。エジプトに帰つちやつてなあ。まあ、離婚したんだ」この後の野口の反応は、雅昭を驚かせるものだつた。

「よかつたじやない。じやあ、オヤジ、母ちゃんも男をつくつたんだから、オヤジも早く女をつくつたら」

雅昭は「ん？」と驚いた表情を浮かべた。

野口は続ける。

「俺にとつては母ちゃんになるんだから、一緒に探そう」

当時を、野口はこう振り返る。

「まあ、子どもだから寂しいというのは正直、あつたね。でも、泣いて叫んで、仮に離婚をその瞬間だけ踏み止まらせたとしても、それが本当にいいのか、という話だと思う。

カイロ時代、日本人学校が終わつて家に帰ると母ちゃんがガマールと一緒に絵を描いている。オヤジには見せない幸せな笑顔を見せるんだよ。あんな顔を僕は見たことがない。『母ちゃん、なんかすごい楽しそうだな』と感じるわけ。

で、その男が帰つて、オヤジが帰つてくると、母ちゃんの顔がまた変わるんだな。でね、僕

にとつては母ちゃんだけど、その前にひとりの人間なんだよな。途中からきつとオヤジも気づいて、オヤジはオヤジで苦しむ。そうすると僕が嫌だつたのは、子どもがいるがためにお互い離婚に踏み切れない、ということだった。

兄貴はこの時は日本に帰つていて家には僕だけだから『ネックは俺か』と思うわけ。自分の存在が理由で、両親が本当は離婚したくてそれぞれの幸せを求めているのに、子どものせいでそれを犠牲にするのは嫌だつた。だから止めなかつた。

でも、そういうえば一回だけあつたな。カイロ時代の小学校四年の時。実際に離婚になるずっと前のことね。夫婦喧嘩をして、母ちゃんが出ていく、という時に、僕が母ちゃんの鞄に噛みついたのよ。鞄には財布とかいろいろ大切なものが入つていてるでしょ。鞄に噛みついで離さなければ出でいかないと思つたんだよね。だから離さなかつたのよ。スッポンみたいに。

いま鞄を離したら出していく、という確信があつたんだよ。それで、ふつと顔をあげた時に、オヤジの顔がね、ものすごく悲しそうに僕を見ていたんだよね。オヤジをすごく傷つけたと思つたよね。あの時は。だから、それ以来、止めないと決めた。

でね、結局、鞄を噛んだ時、母ちゃんは出でいかなかつた。その場は収まつたけど、あの時に鞄を噛んでいなければ、もうちょっと早く皆が楽になつたんじやないか。そう思うんだよね。だから、子どもが鞄を噛んだことによつてね、苦しい時間が延びたんだよ。決して楽には

ならない。だって夫婦関係だから。いくら子どもが止めてもね。苦しい時間が延びただけなんだよ』

野口は両親の離婚についてクラスメイトから「大変だね」と言われた時も「いや、あれはあれでよかつたんだよ」と答えていた。その冷静な返答に驚きを隠せないクラスメイトが多くいた。雅昭とも車の中での会話以外、離婚についてその後一切触ることはなかった。つまり、感情を誰にも見せなかつた。

しかし、実際は別なかたちでそのストレスが噴出する。夢遊病である。立教英國学院は全寮制のため、夜は二段ベッドが置かれた部屋で皆が寝ていた。

立教英國学院で野口と同期の友人である太田光治が、その時の様子を振り返る。
「自分と野口がいた寮には二〇人くらいが寝ていたんです。野口は夜中になると突然起きだして、別な人間じやねえか、っていうくらいに豹変するんですよ。真っ暗闇の中、急にむくつと起きて『オオタアーハー!』と、あの甲高い声がまつたく別な低音になつて。『正座しろ!』と言われて。僕ら全員で正座をして。『校庭を走つてこい』と言われたり。

もちろん走りましたよ。真夜中に。お化けとか幽霊というよりは、宗教の教祖みたいな感じでした。とても逆らえない。服従しないといけない空氣だつた。

ただ、翌日になるとそのことを野口が覚えていないんですよ。これがある時期、毎晩続きました。もう僕らは何回も学校を辞めようと思いましたよ。それで先生に相談をして、看護師さんが睡眠薬を飲むように渡していました。ただ、それでも起きるんですよ。手の打ちようがなくて。その状況が結構長く続きましたね。当時の自分たちの解釈としては夢遊病とか二重人格なんだろうなと思っていました。ただただ、早くこの時間が過ぎないかな、としか思っていました。ある時にピタッとやむまでは毎日でしたね」

この夢遊病のエピソードについて、野口本人の記憶は確かではない。

「夢遊病の話は立教生の中でもタブー中のタブー。二〇年ぶりに『あの時、俺たちがどれだけ怖かったかわかる?』と太田や他の仲間が話してくれたんだよね。彼らに言わされたから、その話をもとに自分であらためてイメージしてそれが記憶になっているのか、本当の記憶なのかはもはやわからない。

でも、確かに覚えていることがひとつある。ふと目を覚ましたら当時の担任の先生が汗だくなつて『野口、野口、しつかりしろ』と言つて。ものすごい力で身体がベッドに押さえつけられていて。その記憶は確かにある」

取材を進める中で、両親の離婚に関して野口が唯一相談していた人に会うことができた。立教英國学院の当時の校長であつた宇宿昌洋の妻であり、一九七二年の開学以来、保健室に勤務していた聖路加国際病院の元看護師、宇宿久美子である。

宇宿は「先生ね、僕ね、うちに帰つたら母ちゃんがいないんですよ」と明るく話しかけてきた野口をよく覚えている。

「そりや大変だ、と思いましたけど、彼はそんな時でも明るいんですね。いつも明るい子だつた。でも、決してそうではないんだ、と感じた時がありました。ある時、数人の生徒とBBC放送の野生動物のドキュメンタリーを見ていたんです。

そのドキュメンタリーの中で母犬が子犬を守るシーンがありました。で、その時に野口君がふと『犬でもあんななのに、僕の母ちゃんは』と沈んだ声でぼそつと呟いたんです。だからね、あの子は明るく振る舞つているように見えたけど、実際はどんなに傷ついていたか。私はそれが一番記憶に残っています」

同様の話は中学校三年時の副担任、高校三年間は担任を務めた信岡新吾も目にしている。

「二三歳で立教に赴任して、ちょうど生徒の名前と顔が一致してきた頃でした。その日は寮の宿直で夜の見回りや寝かしつけをしていた時のことです。

野口が身体を起こしてシクシク泣いていて。『起きているのか。どうした?』と近づいていました。寝ぼけて泣いているような感じでした。宿直室に連れていくて話を聞いても、詳しいことは言わないけど、『動物の親は子どもを捨てない。子どもを捨てるのは人間の親だけだ』って言いながら泣いているんです」

ただ、野口はこれらのことまるで覚えていないといふ。

次の立ち読み箇所に続きます

石原慎太郎

大学卒業を控えた私は、モラトリアムを延長したかった。村上龍と仕事をした影響が強く、サラリーマンにだけはなりたくないと思っていた。就職活動をして会社に入ることは人生の終わりくらいに思っていた。

卒業を控えた私は一体何を思ったか、今度は石原慎太郎の公式サイトをつくろうと思い立ったのだった。「就職活動はしない」と両親に宣言し、「石原慎太郎と仕事をするから一五万円貸してくれ」と言つた。両親を口説けないようなら石原慎太郎を口説けるはずがない、というわけのわからない理屈でなんとか一五万円を捻出することに成功した。

そのお金で石原慎太郎の入手可能な書籍はすべて購入した。私と同じく大学四年で就職が決まつていらない友人を誘い、二人で企画書をつくつた。実はそれまで石原慎太郎の本を読んだことはなかつた。したがつて、熱烈な支持者でもない。さらに政治的な思想が一致するわけでもない。むしろ逆だつた。ただ、東京都知事として君臨し、国に喧嘩を売るようなその姿は眩しく、それこそ石原慎太郎はおもしろい人間の頂点のように映つた。この人を口説き落として、

一緒に仕事をしたらそこにどんな景色があるんだろう。そんなことを想像すると楽しかった。「お前は石原慎太郎と仕事をするんだ」と、まるで天から指示されたような想いだつた。

関連書籍まですべてを読み込み、企画書を作り、鳩居堂の便箋に手紙をしたためた。字が下手なので、清書は母親に筆で書いてもらつた。

「こんな書いたって、会えるわけねえじやんけ」と言いながらも、母は何度も書き直してくれた。私は一ミリも疑つていなかつた。すでに石原慎太郎と仕事をすることは決まっていて、その決まつた道をあとは誤らないように歩いていけばよい。そんなふうに感じていた。

手土産は石原慎太郎が幼年時代の一時期を過ごした小樽の日本酒とした。最後に、アポイントの面会時間を指定する返信用の葉書まで作つて同封した。

田園調布の自宅の住所を調べ上げ、一張羅のスーツにネクタイ、名刺も作り、いよいよ突撃した。二〇〇二年九月、都知事の一期目の時である。だが、予想外のことが起こつた。自宅前にはボリスボックスがあつた。「おいおい、アボなしかよ」とよく日に焼けた若い警官は笑つた。「わかった。手紙も企画書も預かる」と言う。それではダメだつた。それでは他の郵送物と同じになつてしまつ。若い一人の学生がわざわざ自宅まで届けに来た。この事実を石原慎太郎に知つてもらう必要があつた。そうであれば、中身を見るはずだと確信していた。私は警官と一緒に交渉した。「なんなら全部調べてください」と懇願した。

「直接インター ホンを押させてください。ダメならこれから毎日来ます」と続けた。
根負けしたのか警官は無線機を取り出し、氏名、住所から始まり、私の様々な情報を調べ始めた。

「一回だけだぞ」

警官がそう言つた。事前調査で自宅にはお手伝いさんがいることはわかつっていた。インター ホンを鳴らして、お手伝いさんではなく、奥様、あわよくば本人が出ることが私の中での成功条件だった。ここですべてが決まる。そう思つた。

インター ホンが鳴ると、奥様が出た。

二週間後、私たちは都庁の七階にいた。この日はあくまでも秘書が面会するだけで石原慎太郎とは会えない、と事前に言っていた。だが、それは違うと私は思つていた。秘書のお眼鏡に適えば、本人に会えるはずだと信じていた。石原慎太郎の秘書は複数いた。その全員について職歴から趣味まで可能な限りのリサーチをしておいた。おそらく懷刀で切れ者の高井英樹特別秘書がジャッジするはずだと狙いを定めて、当日の面談のイメージを重ねておいた。

はたして当日は特別秘書の高井が登場した。一時間ほどいろいろなことを聞かれ、その後に「じゃあ、この後に知事と会つてもらうから」となつた。案内役の知事部局の課長が震えた声

で「こんなことは前代未聞だ」と私の背中を押した。私より緊張しているようだつた。

実物の石原慎太郎からは、とてもいい匂いがした。事前調査でアルマーニのフレグランスだと知っていたが、百貨店のテスターで嗅いだその香りより心地よかつた。身長は一八一センチのはずだが、それよりもずっと大きく、というよりは巨大に見えた。

「ところで、お前たち、一体どうやつて食つていくんだ?」とあの魅力的な笑顔を見せた。

公式サイト公開までは時間がかかった。石原都政の各政策の紹介文の作成に特に苦戦した。高井からは、なかなかOKが出ない。「もしかしたらダメになるかも」といつた不安がよぎつた。私は大学卒業前の三月に都庁の真裏に引っ越し、高井に電話をして「もう後がないので、よろしくお願ひします」と言つた。高井は苦笑していた。

無事に公式サイトは公開の運びとなり、石原慎太郎事務所から制作・運営費として毎月二〇万円をいただることとなつた。それが私の社会人としてのスタートだつた。石原事務所専属ではなく、あくまでも外注であり、他社とも仕事をしていい、という条件にした。

ところで、私は政治家になりたくて石原慎太郎のもとを訪ねたのではなかつた。私が石原に関心を持ったのは、彼が小説家だったからだ。私はずっと小説家を志望していた。芥川賞を獲

りたい、と願い、学生時代から応募を続けていた。

だが、何度も書いてもうまくいかない。作家になるには文芸誌の文学賞を受賞するのがスタンダードである。およそ二〇〇〇人が応募してひとりが受賞。冷静に考えれば受賞確率はとても低い。だが、その「ひとり」が自分であることを疑わなかつた。ただ、いつまでたつても編集部から電話が来ることはなかつた。文芸誌の選考結果を見ても、一次選考にも残らないことがほとんどだつた。

当時、私だけではなく、そういう人間は周りにたくさんいた。似た者同士が集まるもので、小説家の他にも映画監督、カメラマン、タレント、モデル、役者、歌手、お笑い芸人等を志す者がいた。いま四三歳となり、振り返れば私も含め、誰一人としてその当時の志を叶えた者はいない。少しざれたかたちで着地した人もいれば、まるで異なる世界に行つた人もいた。書いては落選し、そのうちに筆が進まなくなつた。なんのために生きているのか。何をなすべきなのか。そういう自意識と対峙するのが苦痛で酒と女性に逃げた。そんな生活だつた。まだ時間はある。俺だけは違う。そう思わないといと、現実という圧倒的な存在に押しつぶされてしまいそうで怖かつた。モラトリアム人間だつた。そんな時だつた、野口と出会つたのは。

野口健との出会い

野口健と私の出会いは一〇〇三年の梅雨の時季だった。のちに山岳カメラマンとして名を馳せることになる平賀淳が、間を取り持つた。私と平賀とは幼馴染みの間柄だった。平賀がエベレスト清掃登山の撮影を担当しており、その際に私の話をし、野口が興味を持ったという。平賀によれば「小笠原を案内してもらいたい」ということだつた。私はその前年に石原都政が始めた小笠原において行政が主導する初のエコツーリズムについて現地取材をしていた。一〇日間程度、父島・母島ともにくまなく案内され、そのため現地には詳しかつた。野口は東京都の自然保護に関する委員を務めていたが、小笠原にはまだ行つたことがなかつた。エコツーリズムの取り組みを中心に案内し、島の関係者も紹介して欲しい。そういうふた話だつた。

千代田区麹町のダイヤモンドホテルの中華料理店の個室に野口健はいた。シャツにチノパンといつたラフな格好だつた。二人で囲むには円卓は大きすぎた。この時まで、私は野口健についてほとんど何も知らなかつた。村上龍や石原慎太郎に突撃した時や、政策紹介の記事を書く

時のような詳細な事前リサーチは一切しなかった。つまり、あまり興味がなかつたのだ。ネスカフエのコーヒーのコマーシャルとTBS系『サンデーモーニング』のコメントデーター他にはニュースで七大陸登頂やエベレスト清掃登山のレポートを見た記憶が少しあるくらいだつた。私の中での野口健のイメージは「まるで文部省認定のお兄さんだな」といつたものだつた。堅い話になりそうだなと思つていた。

野口は「運転があるからアルコールは今日はダメなんですよ。どうぞ飲んでください」と甲高い特徴的な声で、紹興酒を注いでくれた。「苦手なものはありません」と私が答えると野口は料理をどんどん頼み、私を制して「いいから、いいから」と料理を器用に取り分ける。「こはザーサイがうまいんだ。ザーサイが」と何度も繰り返す割には、自分は一切ザーサイを食べない。世話好きの人々にありがちな過剰な気遣いというよりは、いつもそうするのが当たり前にいつた自然な感じで、逆にこちらが変に気を遣つて取り分けたりしないほうがいいんだな、と思つた。のちに知るが、これは野口のスタイルで、誰かを招いたりした際には必ず野口がサープリズしていた。

野口の話は、予想に反して強烈におもしろかつた。それにもよく喋る人だつた。甲高い

声のマシンガントークはビートたけしの喋り方を髣髴とさせた。そして、一つひとつのエピソードに必ずオチをつけて笑いを誘つた。その笑顔を見ていると、こちらもハッピーになつてきな。石原慎太郎と同じでニクい笑顔だな、と思った。ニコツとしたその笑顔だけで、まるで何をしても許されるような生来のズルい笑顔というものは存在する。野口もそれを持っていた。

「実は、ネスカフェのコマーシャルで飲んでいるのはコーヒージやないんですよ」

「ん？ それはどういうことですか？」と私。

「いやね、僕はコーヒーだけは飲めないんですよ。でね、CM撮影の時に監督さんがそれを見抜いてきたんだね。有名な監督さんで、やっぱりさすがだよね。『おい、野口さん。あんた、コーヒー飲めねえだろ』って。『いや〜、そうですね〜』と頭をカキカキ答えたら、監督さんが低い声で『全然うまそうに飲んでねえもんな。だったら、なんだつたらうまそうに飲めるんだよ』と聞いてくるから『そうですね〜。やっぱ赤ワインとかですかね〜』と言つたの。そしたら監督さんがADさんに『おい、野口先生がワインだつてよ』つてなつてね。しばらくして、ずらつとワインが並んで。『どれにしようかな〜』なんて、こつちも引けずに品定めしちやつてさ」

「え、マジですか？ だつて、コーヒーから湯気出てたじやないですか」と私。

「ああ、あの湯気はCGあとからつけたの。実際はワインなんですよ」

そんなこと話しかけていいのか、と思った私の心の動きをすぐに察知した野口は「いや、さすがにCMの話が来た時には『コーヒー飲めないのにコーヒーのCMはマズいかなと思いましたよ。でもね、自分の本にそれは書いてあるのよ、明確に。『コーヒーが飲めない』と。だから、念のため企画段階から代理店をはじめ関係者全員にその本を配ったのよ。

で、おそるおそる聞いてみるわけ。『本、どうでした?』って。すると皆さん言うんですよ。『いやー、野口さん、あの本は素晴らしい本で、実におもしろくて』って。つまり、誰も読んでないわけ。だつたらこっちもいいや、ってね。まあ、そんなもんですよ」と言い、はい、ここで笑う、といった感じで二人して爆笑した。漫談を聞いているようだつた。

三時間、こんな調子で独演会だつた。だが、ただの一度も自慢話や自分を大きく見せるようなことはなかつた。気取つたところはなく、「そんなこと言つちゃつていいんですか」とからが心配になるようなことまで、おもしろおかしくあけすけに話す。

たぶん、そのさなか、こちらの表情に不安や驚き、笑いや疑問、納得や感動といったものが出てゐるんだろう。それを瞬時に読み取り、次々に話を展開する。その場にいる人を楽しませるのが好きといふか、そうせずにはいられないほどサービス精神が旺盛なんだと思つた。話を聞いていてふと「あ、成功したらこうなるんだろうな」と私は感じていた。石原慎太郎と村上龍にも、同じオーラがあつた。つまり、自覚的にやるべきことを定め、それを個として実現し

てきた人間だけが持つ特有のオーラがあつた。

帰り際に、野口が携帯番号を教えてくれた。こんな初対面でいいの、と私は思った。「いつでも電話して。俺もするから」と握手をしてきた。もう少しだけ力を入れたら痛みを感じてしまう、その一步手前の寸止めの握手だった。グッと何かが持つていかれた。

愛車はジャガーだった。颯爽と走り去るナンバープレートの数字はエベレストの標高八八四八だった。六月の梅雨。霧雨の闇の中にテールランプが消えるまで、私は立っていた。すっかり魅了されてしまった自分がいた。そういえば小笠原の話をまったくしなかつたことに、帰りの電車に乗つてから気づいた。ソニーの大木やコスモ石油の鶴田がその場で魅了されたように、私も野口の魅力に一発でやられたわけだ。

**さよなら、野口健
小林元喜**

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定 價：2,090円(10%税込)
発売日：2022年3月25日
I S B N：978-4-7976-7407-1

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)